

## 鹿島鉄道を軸にした霞ヶ浦再生と地域活性化の提案

エコ・トレイン環境鉄道宣言～「カシテツに乗って泳ぎに行きたい！霞ヶ浦」をめざして

鹿島鉄道対策協議会

会長 横田凱夫 様

2006年9月14日

NPO法人アサザ基金

代表理事 飯島 博

霞ヶ浦の水質浄化と自然再生は、地球温暖化対策等と共に茨城県の重要な政策課題となっています。これらの課題には流域自治体の連携と同時に、関係する地域住民等が一体となって取り組む体制づくりが不可欠です。そのためには地域住民と行政、学校、企業等の多様な主体を結び付け協働を生み出すシンボルが必要です。わたしたちはそのシンボルのひとつが霞ヶ浦・北浦沿岸自治体（4市）を結ぶ鹿島鉄道であると確信しています。

鹿島鉄道は石岡市から銚田市に至る27.2kmを結び、その間に霞ヶ浦沿岸地域や北浦沿岸地域、両湖の水源地域を通ることで、まさに霞ヶ浦・北浦流域を代表する交通機関になっています。車窓からは湖や水田、畑地、平地林、遺跡など多様な環境を見ることができ、湖に関わる自然と歴史、文化そして未来に向けた様々な課題や展望を垣間見ることができます。鉄道は人と人、地域と地域を結ぶ重要な地域資源です。鹿島鉄道はこれらの様々な地域資源を結び付け総合化するひとつの文脈（コンテクスト）として捉えることができます。循環型社会が人と人、地域と地域を結び付ける取り組みから始まることを考えるとき、鹿島鉄道の存在意義は単なる輸送手段という枠組みを越え益々大きなものとなりつつあります。

鹿島鉄道は現在「存続か廃線か」という岐路に立たされています。しかし、同時に、そのことにより沿線のみならず県内外の多くの人々の関心を集め、かつてない大きな求心力を持ち始めています。わたしたちはこれをひとつの好機と捉え、この求心力を活かして鹿島鉄道を軸にした霞ヶ浦再生や地域振興、循環型社会へと展開していくことができると考えます。わたしたちの提案は、鹿島鉄道の活性化を軸に以下の10課題の達成を目指すものです。

1. 霞ヶ浦の水質浄化（とくに、生活排水対策、農地からの流入負荷削減）
2. 霞ヶ浦の生態系保全（とくに外来魚対策）
3. 農業振興（とくに休耕地の活用、農作物のブランド化）
4. 漁業振興（とくに魚粉事業）
5. 観光振興（視察、研修、修学旅行等の誘致、湖水浴場の復活、エコツーリズム）
6. 環境教育（鉄道と沿線を丸ごとフィールド・ミュージアムとする）
7. 学校教育の充実（環境の時代の人材育成、特色ある教育課程による生徒の誘致）
8. 霞ヶ浦の自然再生（泳ぎに行きたくなる霞ヶ浦をめざす）

9．地球規模での共通課題である二酸化炭素削減問題（BDF化）

10．福祉の充実（お年寄りの社会参加、生きがいきづくり、各駅を交流広場に）

鹿島鉄道を軸にした総合的な取り組みによってこれらの多様な課題の実現をめざします。鹿島鉄道を環境の時代のシンボルにします。世界にも例のない先進的なモデルとして広くPRし、多くの人々を鹿島鉄道丸ごとエコミュージアムに呼び込みます。（例、茨城県立自然博物館の入館者は年間約40万人）。

「計画案」

湖の再生との一体化。アサザプロジェクトで実験中の魚粉事業（漁業振興）を拡大し、鹿島鉄道沿線の休耕田を中心に景観作物で油糧作物でもあるナタネ、ヒマワリの生産拠点を設ける。湖の栄養塩をエネルギーに転換する農業漁業工業の循環を作る。農業高校との連携を図り、農業高校としての特色を大きく打ち出す。鉄道経営の複合化。鹿島鉄道敷地内に食用油製造装置一式とBDF製造装置一式を置く。食用油の販売とBDF販売を鉄道の副収入に充てる。食用油は、沿線の給食センターや企業の食堂などに販売し、使用後の食用油を回収しBDFにしてバス、公用車などの燃料として販売する。地域に根ざした経営の複合化戦略。

工業高校との連携。玉造工業高校内にBDF製造装置一式を置く。新エネルギー製造やリサイクルシステム社会化実践に特色を持つ工業高校として打ち出す。

休耕地対策。春先の菜種から夏のヒマワリ、秋の湖面のアサザと時間的空間的連続を考えた生産地整備を行う。石油価格の高騰や化石燃料の枯渇を視野に、休耕地をイエローベルト（油田地帯）として鉄道ファン、エコツアーの誘致をはかる。

水質浄化。啓蒙普及活動。とくに家庭排水対策。流域の学校（小、中、高）住民、企業、公共団体等への環境教育、環境マインド向上への取り組みを図ることにより、食廃油の収集ネットワークを低コストで実現する。

特色ある教育課程（環境の時代に求められる人材育成）沿線の県立高校を、志を持つ高校生が集まる特色ある教育の場にする。中・高一貫教育等を検討する。保全生態学、環境教育、有機農業、リサイクル技術、BDF、環境経済など、環境の時代に相応しい幅広い知識や見識を有した人材の育成を行う。筑波研究学園や大学との協力体制。本提案事業そのものが社会实践を含む教育の場となる。

霞ヶ浦の自然再生。桃浦等の沿線にあった湖水浴場の復活をめざす。沿線一帯の湖岸での自然再生を首都圏から参加者を広く集めて行う。水質浄化と自然景観の再生をすすめ、「カシテツに乗って泳ぎに行きたくなる霞ヶ浦」を取り戻す。

鉄道沿線丸ごとミュージアム構想。鉄道と沿線地域を丸ごと環境学習の場として活用する。湖の再生から循環型社会、地球環境までを学ぶ。フィールド学習。修学旅行や社会見学の団体誘致。各駅毎に体験学習プログラムを作る。湖の自然再生、森林体験、農業体験、漁業体験、養蜂、BDF、自然観察、歴史探訪など。

地域ぐるみの温暖化対策。二酸化炭素排出権取引のビジネス化を検証するためにも、地域のBDF需要量を予測する。鉄道（鹿島鉄道の親会社である関東鉄道にも利用協力を依頼する。）ディーゼルエンジン自動車燃料用途のほかに、事務所、農業等への暖房用途への転用の可能性を調査し、需要量予測を極大化する。

流域管理。水源地の涵養、生態系の保全、水質浄化、景観の保全等のための里山整備事業に首都圏から参加者を誘致し鹿島鉄道活性化と連携させて推進する。本事業による数値目標。水質や生態系の改善、地域活性化の数値目標を示す。

経営改善に向けた計画づくり。上記の提案に基づき鹿島鉄道存続のための乗客・運収・経営体力増強に資する短期、中期別施策を取りまとめる。

この提案が実現すると、鹿島鉄道を軸に湖や流域をめぐる大きな循環（人やモノや金の流れ）が生まれます。わたしたちは霞ヶ浦流域全体を覆うネットワークづくりの象徴として鹿島鉄道を位置付けます。この取り組みは環境立国をめざす日本の先進的なモデル事業（動態展示のエコミュージアム）として内外にPRしていくことができると考えます。

この提案は、鹿島鉄道をはじめとした地域に今ある既存の各種施設や事業、産業の活性化策であり、それら多分野の協働によって循環型社会への転換をはかるものです。わたしたちが目指すのは、環境保全と地域振興の両立です。

この提案を具体化するためには、まず、鹿島鉄道の環境鉄道・エコトレインとしてのシンボル化が不可欠です。それには、環境負荷の少ない輸送手段としての評価されている鉄道に、さらに環境保全に寄与する様々な要素を加え、鹿島鉄道そのものの付加価値を高める必要があります。鹿島鉄道に様々な付加価値をもたらす契機をつくるのがバイオディーゼルの導入です。バイオディーゼルの導入を契機に、鹿島鉄道を軸とした循環の輪が次々と広がり、湖や森、田畑、街を覆うことになるでしょう。循環型社会を構築するための牽引役となるのが、鹿島鉄道です。未来への地域づくりの物語はカシテツから始まります。

バイオディーゼル導入等の具体的取り組みについては「バイオマスエネルギーの公共利用による地域活性化モデル事業（案）」をご参照ください。

